

ジェイコブの部屋

小野寺那仁

そうして私は次の部屋の前に立つ。既に記憶は波に洗われる海辺の星砂のように跡形もなく非常に都合よく陶酔的な気分さえ訪れていた。ただ長く先の見えない石に囲まれた廊下だけは数時間か数十分以前と変わらず、私は自分を取り戻した気分になる。

次の部屋のドアノブをあわただしく回したくなるのはひとつにはその廊下にいつまでも居たくないからだ。うつすらと幾つかの罪を犯した感情もかさぶたほどには残っているためにせかされるような気分にもなることと警備会社からの復讐に怯えることからくる入りまじった感情からであった。次の部屋に対する興味からではない。まあ、ただ筆記体で書かれた表札のようなものには「ジェイコブ」とあり病室か何かのようでもホテルのものとは思えなかった。

例によって私はノックもせずに無人かもしれないその部屋の重厚な扉を開ける。

広葉樹が、もちろん観葉植物なのだろうがいくつかあっていきなり飛び込んでくる緑に私は戸惑い警戒した。視界が覆われている。空調がほどよいのか涼しげな空気が頬に当たる。そこで私は今までの失われた感覚が戻っているのを訝しくも思うのだが。

「ジェイコブ」何故か私は大胆にも流暢な発音で声を掛けている。私は英会話を数年も続けていたのでそういった発音もできないこともないのだろうが、かつてないほど巧く言えたことには驚かざるをえない。もちろん、ずっとそれは感じていたことだが、すでに私の私に対する情報とかイメーজというものが差異を起こしているのは明らかであって今さら驚くことでもなかった。視覚的に緑色のハレーションを起こしているのだが、それは情報としても認知としても音響的にも、いやありとあらゆる物事に対してハレーションを起こしているような感覚だった。

反応する声がなかったので私はもう一度彼の名を呼んだ。

「ジェイコブ！」半オクターブかあげていたと思う。すると鬱蒼と茂る植物のはるか向こう側から背中を丸めたかなり年配の学者のような風貌の男が、縁なし眼鏡をずらして老眼の男がよくするようにレンズを通さずにこちらを見つめていた。彼は英語で私に何か言った。たしかに英語はさっぱり聞き取れなかった。にもかかわらず私は彼に向かって歩み始めしつかりと両手で彼の覚束ないしわだらけの片手を握りしめていた。

彼は不機嫌を露わにしている。私を新米のボーイとでも思ったのだろう。もし私が警備会社の制服かホテルの金モールを施したボーイらしき衣裳を纏っていたならばいささかも不自然ではないし躊躇なく自分の意志を貫いて堂々と理不尽なことも主張できるのであるが、そうするには私の外観はみすばらしく衣裳も雨に濡れてありきたりなジーンズにTシャツといういでたちも不信を買うには十分であった、はずだ。私は闖入者という言葉がこ

れ以上びったりとあてはまる状況はないほどにさまざまな条件を満たしていた。ただ言えることはこれまでの部屋でも同じようなことを繰り返してきたので今までにどんなことが起きたのかはすっかり忘れてしまったものの身体は覚えているということであった。実際のこのホテルはすでにボーイを雇うような資金の余裕はなく厄介者なのはこの老学者のほうなのだとは思ったが何もホテルの経営陣の立場でもない私は余計なことを言う資格も何もあったものではない。私は次の日本語が口から出てこない。何を語りかけていいのやら彼が日本語を解するのかそもそも彼が私とコミットするのを望んでいるのか推し量りかねていた。

「そりゃ、ニホンゴを話せというなら話せないわけではないが、もう随分長く使っていないでね、まあ全く英語が出来ないんじゃないや仕方ない。ところで何か、事務の手続きでも変更があったのかね？ それとも食後のデザートやコーヒーの差し入れをする気になったとか、或いはジャグジーが使えるようになったとか、美人の秘書が手に入るようになったとかそういう朗報かね？ そうじゃなかったら私はあんたの相手をする気はないんだけどね。もう何年も人とは話していないんだよ。そして今言ったことを何年も前にホテルの齋藤支配人に頼んだはずなんだが、あの人辞めてしまったな。定年を迎えたらしいじゃないか」

「それだけ話せたら十分です」私は彼の日本語に満足していた。うすうす非常識なことはわかってはいたんだが、この人は理解のある人だと私は話を聞いて分かった。なにせ今までの住人ときたらとんでもない連中の集まりであったから。むろん、そんなふうには他者を断定する資格は私にはなく、私はますます悪い立場に追い込まれる。まさに闖入者と呼ばれるにふさわしかった。私は苦し紛れに半ば自棄になってこう切り出した。どうせ殺人まで犯した身だった。怖れるものはない。だが、その記憶だけはぬぐえないのはどうしてなのだろう。他の部屋の出来事なんてとどころしか覚えていないのに。

「いえ、私はボーイでもなんでもありません。セールスマンです。夢というのがいかがわしい商品であるかもしれませんが、私は究極の商品である夢を売っているんですよ、ほらよくセールスは夢を売ることだと新人教育で言うじゃないですか。多くのビジネス書もそう言ってますよね」

「ああ、それなら……どうせそんなことだろうと思ったよ」判で押したように彼は落胆の表情を浮かべて両手を広げた。飛び込み訪問はほとんどの場合、誰も歓迎しないのだ。ただ、今回はそういうつもりはまったくなかったので自信を持って私は彼の言葉を遮る。

「いえいえ、警戒は無用です」私はにやりと笑った。おそらく顔つきは自信満々のいやらしさに満ちていただろう。「私は商売に来たのではありませんよ。あなたとお話したいから来たのですよ」

「まさか、政治的にどうこう言うんじゃないだろうね。何処かの国のスパイとか警察とか。わたしや、一切関わらないことに決めているんでね。日本の情報も何も持っていないよ。私は誰とも関わりたくないし、取引もしたくないんでね」いかにも面倒そうだと言わんばかりに。

「もちろん、何もありませんよ。あなたとお話ししたくなっただけです」

私は自身が制御できなくなっていた。私は英語をしゃべり始めた。やはり流暢な発音だった。内容がまるでわからなかった。自分で考えている訳でもないのに私は英語を話している。しかもジェイコブは笑顔を浮かべながら相槌を打っている。私は彼とコミュニケーションできたようだ……いや、これでも今までの経緯を考えればさほど不思議な事ともいえないだろう。このホテルではどんなことだって不可能ということではなく超常現象と思えることさえ起きていたようだ。確か死者も既に何人も出ているのだから。ただ、私はすっかり忘却していると言ってもいいだろう。だが、ところどころは夢の欠片のように憶えている。それは切れ切れの、カラージュのような、芸術作品の断片のような、前衛映画のフィルムのような、印象の曖昧な記憶の集積だった。復元は容易ではない。そもそもこの世界が秩序立っていることが不可思議というものだ。

そうして私は自分の制御可能な時を待った。何かができるようになるまで待つということはある。腰が痛くなつて動けるようになるまで待つなどの場合がそうだ。今は逆に何かができなくなるまで待つ。というのはいくらかは奇妙なことかもしれない。抑揚のある聞いたことのない自分の声がジェイコブの少し甲高いけど格調のある発音と交錯しているのだった。英語はナチュラルハイの状態になると考えることなく話すことは可能ではあった。ただ、自分の話していることが理解できないとは呆れた現象だ。

ジェイコブの表情は俄かに緩み始めた。それで私もまた、なんとはなしに困難な試みに成功したような安堵感に包まれた。自分の表情もつられて緩んできたのをはつきりと感じた。いったい何の話をしているのだろう。私は拙いながらも必死で彼と私？との会話の内容を探ろうとしていた。耳を澄ませばいいのである。そこには正統的な英語が横たわっているだけだったから。

ジェイコブの顔はくしゃくしゃになり、涙がとめどなく流れ、滴り落ちていた。床は濡れているほどであった。彼は、振り返る。部屋の内には扉があった。雑多な書物の回廊には埃と蜘蛛の巣がいくつもあった。蜂の死骸も。彼は数冊の書物を手に取った。そして私に手渡してきた。私は、内心は戸惑っていたのだが、手さばきよく書物のページを繰って、老人に読み聞かせるように文字を追って朗読していた。情けないことではあったが、それでもなお私には意味が霞のようにつかめなかった。そして泥が耳に栓を込めているかのようにはほとんど何も聞こえてこない。私の口唇のみがせわしなく動いてやまなかった。やはり今までの経緯からすればこれぐらいのことではさほどは驚かず、世の中で起きる現象のほとんどはおそらく不思議でもなんでもないだろう。

たとえばバイリンガルは二国の言語を操るが、言葉によって表現される人格は同じものではないように思う。一方がコミュニケーション不足で一方が過多ならば形成される人格は別なものになることはままある。同様に後天的に外国語を習得した場合でもコミュニケーション過多から別人格が立ち上がることも何度となく見てきた現象なのだった。もしもいびつな人格の立ち上がるのを拒むならば言語を後天的に習得することはできなくなつてし

まう。

いったい英語を話している私とジェイコブは何を親密に語り合っているのだろうか？

私が手にしている本は教科書に出ている一八世紀の初版本のように装飾された文字で粗末な紙に印字されているものであった。独特の匂いが漂っている。

「何ですか？　これは？」私は心の中で尋ねてみた。それはそうだ、そう思っている間にも私の、別人格とジェイコブは語り合っているのだから。するとどこからともなく声が降るように聞こえてきた。それがジェイコブの声なのかは定かではない。

「バイロンさ。君は暗記していたんだぜ。ほら、いつか暗記したことがあっただろう？　憶えていないのか、ね？」

「憶えていない」私は力なく答えた。学校の英文学の授業はロレンスとジョイスであってそれを訳していたことはあったが、あと原文で読んだことのあるのはサリンジャーとかO・ヘンリーとか、ああそうだ、短文ならシェイクスピアやエドモンド・ウイルソンやテリー・イーグルトンとか、ああ、そうだ、そういえば留学生だった親戚にバイロンも読まされたことがあったかもしれない。

「君はジェイコブに天使と戦っているのかって尋ねたんだぜ」

「……」

これは誰が話している言葉なのだろうか？　ジェイコブだったら、ジェイコブが……なごとは言わないだろう。まあ、でも細かいことは気にしないことにした。

「単なる気まぐれでしょう。そんなに意味はないですよ」

「キミと言う奴は本当に英語と日本語では随分と違っているんだね。そんなに性格が変わらないのが普通だと思っただけど」

「あなた、誰ですか？」

「あなたとたいして変わらない存在さ、ただ内面のみが生き続けるという、そうそう、天使との戦いというのがジェイコブのツボにハマったみたいだね。もうすっかりあなたに夢中さ、彼は。御年九〇歳まで生き延びた甲斐があったというものだね。ただ、それが最期の悪あがきとなることはよくあることさ。あんたが死神でないことはわかっているが、あんたの別人格が天使の皮を被っているとしたら罪な話だ。まあよくあることだね。気をつけなよ。面倒なことに巻き込まれないとはいえないからね」これをしゃべり続ける奴の姿は私には見ることはどうしてもできなかった。

やっぱりジェイコブが語っているのではないのだろうか？

それならばそれでもよかった。問題は次第に私が現状を受け入れつつあることだった。

次第に私は耳が慣れてきて、自分の操る流暢にして精確な英語もジェイコブが語っていることもすべてとは言わないまでもおおよその意味を汲み取るくらいは可能になっていた。それによると、まあ、読みにくいだろうから敢えて英語では記さないが、おおよそ次のようなことであった。

なんでもその私とは名ばかりであるその男の年齢は二十八歳！　であり、実際の私より

も十数歳も若い男であり、名前はヘンリー、溯ること数年前にイギリスを離れて世界各地を軍関係の仕事で転々としていた。学者で平和主義者である父親！ のジェイコブ氏は相手に気に病んでいたらしい。初めの頃はちよくちよく電話も入れていたのだが、意に反してヘンリーを罵ったことがあり次第に消息がわからなくなつて数年が過ぎたという。そのうちにジェイコブ氏もまた、大学退官後は屋敷を売り払つてどこか安全な国はないかとヨーロッパを彷徨う生活を続けてきたが、通貨の変動リスクから逃れているうちに日本という選択肢に突き当たつた。いや、もうヨーロッパが嫌になつた、いつそ英語の通じない国で誰にも逢わないが、意外に快適な先進国並みの生活が送れるなら極東の地でも構わないだろうと思ひ起つた。そうしてひとり息子のことはすっかり諦めていたという。

そんな話を聞かされて私はおそろる洗面に顔を近づけてみた。ちらつと見たに過ぎないが、金髪と碧い眼が映つていたのは当然とはいへ、あまりいい気がしなかつた。

なんでこんなことになつてしまつたのだろうか？ 英語を必死で勉強し過ぎたせいであろうか？ いや私はそのような記憶が喪われていてなれば記憶を取り戻す旅を続けていたのではなかつたのではないか。そうそう警備員には悪いことをしたのだつた。だが、どうやら糸口として、私はかつて必死になつて、それこそ外国人にならんばかりに英語を学習していたという事実はなんとか掴み取つたのだつた。それならばこれもまた収獲であろう。

ヘンリーはいつか父親と見たバイロイトのワーグナー歌劇について語るとジェイムズは感涙にむせんで語る。

「ああ、いつかまた見たいなあ、いや今すぐ見に行こうじゃないか、今じゃなきやもう行くことはかなわないぞ、私は天使どもにすでに何太刀も浴びせられていてもうふらふらじや、金なら腐るほどある！ もう軍関係なんて危険な商売はやめることだな、ああ、わかつている。お前は私に反発していたんだよ。ノブレスオブリッジなんてもうどうでもいいじゃないか。それも私に起因するのかもしれないがね。」

「父さん、僕ももう四十過ぎたよ。いつまでもふらふらしてる年齢でもないと思うんだ。幸い日本に職を得て、ああ、もちろん平和な産業だよ。ずっと住めないことはない。ここも大使館に聴いたんだよ。父さんがどんなに逃れようとしても、こんな遠い日本であつても、もうすっかりばれちゃつてるわけさ」

「ああ、日本は意外とダメな選択肢だつたかもしれないが、私はあからさまな贅沢は好きじゃないんだよ。見てみるよ、このボロボロのホテルは。なかなか風情があつていいじゃないか。セキュリティは大問題だけどな。しかも世界の一流ホテルに比較するとサーピスの悪さは世界一だよ。日本人はチップの習慣がないからホテルマンが育たないんだ。まあまだまだ貧乏な国なんだろうな。いやあ、バイロイトはいいよ。本当に」

ああ、二十八歳じゃなかつたか、私は自分の過ちを恥じていた。もはや私日本と日本の意識は次第に薄れていた。眠りにつく寸前だ。もはや何も考えられない。穴に落ちた時、警備員を殺めた時、大渦巻に呑みこまれた時、あの時と似た感覚だ。いったいいつになつたら影を失つた女に辿り着けるのだろうか。

こっちにおいで。ジェイコブは私と言うかヘンリーをいざなった。洗面を横目に廊下を歩むと寝室は咲き乱れた花がありベッドがあった。点滴台から滴り落ちるブドウ糖。ひとりの老いた女性が横たわっていた。

「母さんだよ」彼女はもうそこで何年も死の淵を彷徨っているにちがひなかった。

「見るんだ！」ジェイコブはヘンリーともキャサリンともつかないあらゆる方向を見つめながら言った。一瞬、凍てついた薔薇が緩むかのような錯覚が起きる。彼女は眼を開いたのだった。そうしてヘンリーは駆け寄った。彼は母親にキスした。「僕だよ。長い間、いなくなっていてすまない」

(了)